

人権主日
説教

隣人の中のイエス

＜マタイ 25章31～40節＞

中江 洋一 牧師（広島教会牧師）



「在日大韓基督教会宣教100年史」（李清一牧師著）の中に、「在日大韓基督教会は、第29回定期総会（1973年）において、『宣教基本政策』を採択し、聖書において証しされた福音を在日大韓基督教会が置かれた文脈の中で受けとめ、福音の時代的な使命を明確にすることを目指した。……特に在日韓国・朝鮮人にとっての救いとは、政治的・社会的・思想的といった生の全領域における抑圧からの解放であるとされ、在日韓国・朝鮮人の『人権擁護と福祉問題とが、福音宣教の業と全的關係を持ってくるのだとの理解を、われわれの総会における宣教基本政策の基本的姿勢とする』と宣言している。……この『宣教基本政策』は、宣教60周年の標語『キリストに従ってこの世へ』に示された方向性を神学・宣教論的に深めることによって、在日大韓基督教会の宣教政策の転換を基礎づけた歴史的文書であったと言える。」（218～219頁）と記されております。

この宣教政策転換の流れの中で、在日韓国・朝鮮人の人権問題への取り組みが行われ、人権差別撤廃運動として、指紋押捺拒否運動を積極的に展開して行きました。総会は、この運動支援と共に、人権差別の現状を知らせることを目的として、歴史的に忘れることが出来ない関東大震災・朝鮮人虐殺事件があった9月1日を記念する意味で9月第一主日を人権主日に定めることを1985年第38回定期総会において可決しました。

この人権問題への取り組みは、現在、在日同胞に留まらず、難民及び労働移住者の人権問題、すべての在日外国人の人権問題へと、その視野は広がっております。

人権の問題を政治問題としてとらえ、そういう政治問題を教会の中で語るのにはやめて欲しいと言われる方がおられるかも知れません。しかし、これは他ではなく「信仰の問題である」、あるいは「信仰の質が問われているのだ」と思うのです。特に私たちの教会が自らがそうであったように、人権が踏みにじられている人びとの姿の中に、キリストを見い出していく、そういう信仰が問われているのだと思います。

主イエスはユダヤ社会の中で罪人と断罪され社会の底辺へと追いやられた娼婦や徴税人、病人や障がい者、また異邦人らと積極的に関われ、病をいやし、罪の赦しの宣言をなされ、

神の民として生きることを勧められました。主イエス・キリストは確かに彼らの中におられたのです。

さて、マタイによる福音書は譬えを用いた「教え」が多いことが一つの特徴ですが、その中でも特に重要なのが、5章から7章のいわゆる山上の説教であり、25章に記された「最後の教え」です。特に25章は、受難物語が始まる前の、いわばマタイによる福音書におけるイエス・キリストの遺言のような教えです。この教えの中心は、次の言葉です。「この最も小さな者の一人にしたのは、すなわち、私にしたのである。」（マタイ25：40）

ここでは終末における裁きについて語られておりますが、それは未来のことを語りながら「『今』私たちがいかに生きるべきか」が語られております。「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」（マタイ25：35～36）

ここには、食・住・衣・健康・自由という5つの基本的人権に関わることが取り上げられており、人が人として生きる上で最も基本的な事柄が脅かされている人々に対する、関わり方が問われているということです。しかも、その人権が脅かされている人々が主そのものであるかのように表現されているのです。すなわち、主イエス・キリストがそのような人々とのところにおられ、一体となっておられるということです。それはつまり、イエス・キリストは、私たちの助けを必要としている隣人として生きておられるということです。それならば、私たちがキリストと出会うということは、こうした隣人を通して出会うということではないでしょうか。

今、コロナ禍の非日常的な異常事態が続いております。それにより、人々の「恐れと不安」が社会的弱者に「差別と排除」となって向けられております。この社会的な不条理を拡大させないためにも、私たちは自分の中にキリストを見い出そうとするのではなく、隣人を通してキリストに出会うために出て行かなければならないのではないのでしょうか。

ルツ結婚相談所

在日韓国・帰化人、結婚・再婚を望んでいる人へ
年齢 23歳～70歳まで、北海道から九州まで

親身になってご成婚までねばり強くお世話を
させていただきます。お気軽にお電話ください。

090-3429-9707 代表 崔貞淑

韓日対照讃頌歌販売



韓国の新讃頌歌版です。交読文も韓日対照で掲載されています。

●B6版変型・1483ページ

●価格：2,500円（消費税・送料込み）

※お求めは総会事務所へ

全国女性会

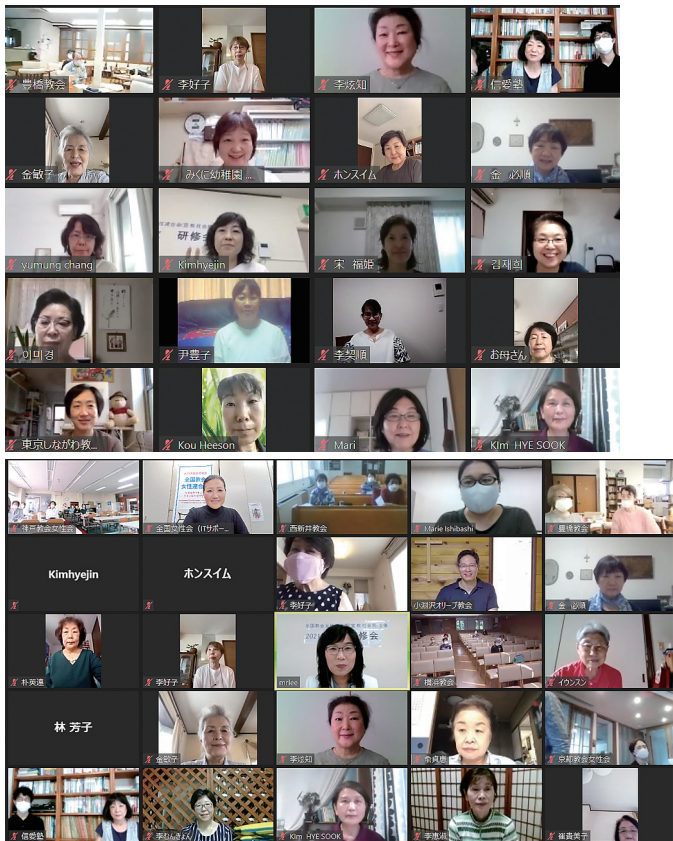
宣教社会局で研修会開催 リモートで行い、全国104名が参加

全国京会女性連合会では、2021年7月10日（土）に「主に接ぎ木された者として～誰がこの人の隣人になりましたか～」という主題・副題でリモート研修会を行い、104名が参加した。

李炫知会長の開会祈祷で始まり、1部は小淵沢オリーブ教会の坂本高志牧師による「誰がこの人の隣人になりましたか？」という主題で講演し、2部は「コロナ禍の中で子ども、ひとり親、移住外国人の現状」について横浜にあるNPO法人信愛塾の竹川真理子センター長が講演した。講演後にはグループ討論、発表の時間をもち分かち合いの時をもった。

長らくコロナ禍の中で、御言葉によって力を受け、今参加者がすべき事を学ぶ時間となった。画面上ではあるが104名の参加者と顔を合わせることができたのも感謝であった。

(報告：宣教社会局員 金恵珍)



関西地方会

裴貞愛牧師委任式挙行 李相萬長老就任式も一枚岡教会一



裴貞愛牧師



李相萬長老

去る7月25日、関西地方会枚岡教会において、裴貞愛牧師委任式及び李相萬長老就任式が行われた。臨時堂会長全聖三牧師の司会により開会され、説教を金武士牧師（大阪西成教会）が、「柔らかな心で」（二テモ1:14、一テサ5:16～18）という題目で行った。引き続き関西地方会長許伯基牧師の司式のもと、牧師と視務長老の紹介、誓約の後に宣布された。

この度、枚岡教会に委任された裴貞愛牧師は、1962年韓国で生まれ、大邱の啓明大学を卒業し、日本で関西聖書神学院、同志社大学院神学研究科を卒業し、2018年5月、関西地方会において牧師按手を受けた。家族は、夫、2男、2女。

枚岡教会の視務長老として就任した李相萬長老は、1962年韓国で生まれ、2010年に大阪北部教会にて長老として将立され、枚岡教会へ移籍した後、この度視務長老として就任した。家族は、夫人、2男、2女。

中部地方会

金炯振牧師委任式挙行 千曲ビジョン伝道所に宣教師として派遣



去る8月26日、中部地方会の千曲ビジョン伝道所では、韓国から宣教師として赴任した金炯振牧師の委任式が行われた。

新型コロナウイルスの拡散によって遅れて行われた委任式には臨時堂会長の崔和植牧師司会のもとで開会され、説教は金明均牧師（名古屋教会）が、「わたしから聞いたことを」（第Ⅱテモテ2:1～2）という題名で行った。

委任式は、中部地方会会長の金明均牧師の司式で行い、紹介、誓約、祈祷後に金炯振牧師が千曲ビジョン伝道所の担任牧師であることを宣布した。

この度、委任された金炯振牧師は、1972年韓国で生まれ、白石大学神学大学院を卒業してから2007年大韓イエス教長老会（白石）で按手を受け、この度日本宣教師として派遣された。

家族は、夫人、1男1女。

公告 在日大韓基督教会 第56回 定期総会 召集

在日大韓基督教会 第56回定期総会を総会憲法第13章（総会）、第60条（定期総会組織）、第61条（定期総会召集）と総会規則第2章（定期総会）、第3章（総代）第3条（総代及び準総代）、に基づいて次のように召集します。

(1) 主題：「고난의 시대에 평안과 희망을 주는 교회」(예레미야 29:11)

「苦難の時代に平安と希望を与える教会」(エレミヤ29:11)

(2) 日程：2021年11月23日（火）10:00～18:00（一日のみの総会）

(3) 会場：在日大韓基督教会 大阪教会 大阪市生野区中川西2-5-11 (☎06-6712-3377)

※「総代・準総代の交通費・宿泊費は各地方会が負担し、女性会・青年会代表はその機関が負担する」
(総会規則 第3章第3条4項)

2021年8月1日

在日大韓基督教会 総会長 趙永哲 書記 梁榮友

全協OBに聞く3

一生の仲間

熊本教会牧師 金 聖 孝



1980年5月の光州事件を世界に伝えたドイツ記者と、彼を事件の現場まで送り届けたタクシー運転手の実話をベースに描いた映画「タクシー運転手 約束は海を越えて」(2018年)を観ながら、初めて参加した1980年8月の全協修養会(鷺羽山)を思い出さずにはいられませんでした(代表委員:

李根秀、総務:李相鎬)。

誰が行ったのか、特別報告として光州事件の実態を聞く時間があり、衝撃を受け、みんなで祈りの時間を持ちました。

修養会から帰り、光州事件を知った青年として何を為すべきかという議論の中で、祈禱会をささげることになりましたが、会場を許可してくれたのは関西では大阪教会だけでした。1980年の私たちを取り巻く政治状況はそれほど厳しいものでした。

その後、青年会の中で不協和音が起り、祖国の民主化を願い、民族差別と闘い、在日としてのアイデンティティ確立を目指すグループを「社会派」と呼び、社会的な問題を一切扱わず信仰を深めることのみを主張するグループを「福音派」と呼びあうようになりました。南北分断に痛みを持つ在日の教会青年会にまで不毛な分断が生じてしまい、その寂しさは言葉には表せないものでした。おまけに、修養会是在日同胞のクリスチャンが一堂に会するので、それは楽しく朝から晩まで弾け羽目を外すものですから、総会で度々批判を受けました。修養会はずまずきになるので青年を送れないと。すみません!

1980年代を中央委員として関わり、代表委員を2期務めた者として、不足でダメダメなことばかりでしたが、素晴らしい先輩や仲間と出会い活動できたことは恵みでしたし、私たちを見守り指導してくださった牧師任長老任に感謝しています。

実は全協の先輩や仲間が牧師あるいは長老として多くこの総会で働いておられます。皆さん、あのときから何も変わっていません! 40年も経っているのに。かく言う私もモノマネソニヒョは変わっていません。青年会の仲間は一生の仲間なんです。

肥沃な土壌のような居場所

京都南部教会牧師 許 伯 基



全協がなければ、今の私はありませんでした。牧師にもなっていなかっただろうし、自分の祖国や在日性にもこれほどこだわっていなかっただろうし、EYCKとのつながりで留学した韓国で、妻と出会うこともありませんでした。私の人生を形づくる肥沃な土壌のような存在が、全協でした。その

ような意味で、全協に出会わせてくださった神さまに、そしてあの場で出会った当時の青年たちに、そして、実りの見えにくいあの活動を物心両面で支えてくださった在日大韓の信徒の皆さんに心から感謝しています。

全協において、私は決して中心的存在ではありませんでした。中央委員をたった1期2年、それも一部員として、先輩たちの後ろをちょろちょろとついて回りながら、不真面目な小間使い役をただけでした。私が全協に貢献したことは何もありませんが、私が全協から受けた影響は絶大でした。小さい頃からなんとなく、いや、親から強制されて仕方なく通っていた教会に、はじめて居場所を見つけることができました。韓国ではなくこの日本に、在日コリアンとして生を受けた意味を悟ることができました。キリスト者であることと、民族マイノリティであることと、だからこそ社会に働きかけていくべき何かの役

割を与えられていることが、自分の中で初めて一つに結びつきました。それ以降、迷ったり道を外れそうになったりということが何度もありましたが、結局はあの時の熱い思いを心の深い場所に持ったまま、この道を歩いています。

10代の最後から20代の最初にかけての悩める多感な時期に、多くの良き友や先輩たちと出会いました。夜を徹して答えの出ない議論を繰り返したり、お互いのこだわりをぶつけ合ったりしたあの頃が、今でもよく懐かしく思い出されます。あの場所は、もっとも素直な自分の姿をさらすことのできる場所でした。そのうちの数人は、私の人生でもっとも貴重な友人として、今でも私を祈りやアドバイスによって支え続けてくれています。

残念なことは、あの時熱く信仰を語り、義と愛に燃えていた多くの仲間が、教会を去ってしまったことです。これからの全協が、私にとってそうだったように、自分の人生の置かれた意味を気づかせてくれる場所であることを祈りつつ、応援し続けていきたいと思っています。

『信仰と希望と愛』の道標

横須賀教会 尹 卿 恵



1980年春。京都教会青年会に入会しました。当時の私は、生まれ育った日本社会の中で、みんなと違う「在日」である自分のアイデンティティに迷い、常に緊張して生きていました。青年と呼ばれる時期になり、いよいよ社会に踏み出さなければならぬ私にとって、在日大韓基督教会は、そんな緊張から解放される、唯一無二の深呼吸ができる居場所でした。

将来に夢も希望もない消極的な私は、その年の夏、初めて先輩青年たちに連れられて岡山の鷺羽山で行われた全協の修養会に参加しました。全国から集った青年たちは、全協代表委員の発題を皮切りに、熱心に聖書を読み、讃美し、祈り、涙を流し、南北に分断された祖国を憂い、民主化を求める韓国のクリスチャン青年たちとの連帯と日本社会の人権問題を熱く議論し、朝まで語り合い、早天礼拝は睡魔と闘い…と、密度の濃い3泊4日を過ごしました。正直、自分が生きることだけで精一杯だった私には、出自に繋がる祖国に対する思いは、「厄介な存在」でしたが、その時初めて、祖国を想い平和を祈りました。

先輩たちは、新人の私たちにとても優しく声をかけ、小さな声にも耳を傾けて聴き、受けとめてくれました。そして、いつしかその小さな声が、分団のスタンツ(寸劇)のメインテーマとし、「私の想い」が共感され、そこにいるみんなの「共有の経験」になっていく瞬間、自分の十字架(重荷)が軽くなっていく安堵感を感じました。私の十字架を一緒に担いでくれる「仲間」がいる。そのかけがえのない仲間の真ん中にイエス・キリストがおられる。修養会からの私の帰り道には、生きる道標が備えられました。

その後も、様々な牧師任と仲間を支えられ、日本国内のマイノリティー会議(北海道・沖縄)、WSCFのアジア青年研修(香港1ヶ月)、NCC青年交流会、京都東九条現場研修、全協中央委員会と大切な出会いを与えられ、その経験が今日に至っています。

豊かな味、豊かな心。



妻家房

SAIKABO

代表取締役 吳 永錫 (東京希望キリスト教会 長老)

四谷本店: 東京都新宿区四谷3-10-25 Tel. 03-3354-0100

ミャンマー軍事クーデターから半年 ～一枚の布のような市民の抵抗運動～

マイノリティ宣教センター 共同主事 渡邊さゆり

2021年2月1日ミャンマーにおける軍事クーデターが起こされました。ミャンマーでは、10年前の民政移管後も国軍権力が温存され経済成長にばかり重点が置かれました。「アジア最後のフロンティア」と呼ばれ、大企業はこぞってミャンマーに経済侵出しました。地下資源採掘に伴う乱開発が国外企業によってなされ、住民（特に少数民族）は、公害と労働搾取に苦しみ、開発への抵抗運動もありました。しかし、国軍は鎮圧と称して自国民を撃ち続けました。国軍に守られて外国企業はミャンマーを食い物にしてきたのです。その国軍が、抗日軍として1945年3月27日に結成されたということに心を刻んでいます。国軍の「モデル」は、日本帝国軍で、その残虐性は日本に負う所が多いのです。

ミャンマーは135以上の民族によって形成される多民族国家です。イギリスからの独立以降、ビルマ族優遇政策下で、民族独立を求める抵抗運動は、ずっと続いていました。この延長線上にこのクーデターがあるのです。

クーデター直後、軍は戒厳令を発動、全権を国軍総司令官ミンアウンフラインが掌握したことを宣言しました。都市部の市民は商店、銀行へ殺到し、市民生活は一夜のうちに変わり、人々は失意の言葉と抵抗への呼びかけをSNSに投稿し続けました。特にZ世代と呼ばれる10代後半から20代の若者たちは奮い立たされたのです。抵抗は即座に始まりました。鍋叩きは、ミャンマーの風習で「悪」を追いつく行為と考えられていました。人々は鍋を叩き続け「私たちは国軍による政治は認めない」と訴え続けました。

大規模なデモが全国で行われました。反軍事抵抗運動はNLD（国民自由民主党）の指揮下にあらず、各地域、世代、宗教、コミュニティごとに自発的に行われました。その一つ一つの糸が一枚の布を編むように今も続いています。

同時に、「CDM」市民不服従運動が広がりました。医療従事者たちは、国軍による政治への不服従を決意し、職務停止を宣言しました。CDM参加者は解雇され、現在も生活困窮にあります。CDMは他の職種にも広がり、鉄道員、公務員、教師…。国軍はCDM参加者を反逆者とし、逮捕、拘束します。7月末現在で国軍の攻撃によって殺された人々は930人以上、負傷者はその数十倍、拘束された人はのべ1万人近くになります。拘束された人々は相当な拷問を受け、亡くなって遺体が放置されていたり、遺体引き取りを有料で家族に連絡したり、そのような報告が後を絶ちません。

現在、ミャンマーは新型コロナウイルスの感染が拡大し、三人に一人以上の陽性率です。この事態に際し民間人への酸素ボンベの供給を国軍は制限しました。ミャンマー人はこう言っています。「金がなくなり、自由がなくなり、食べ物なくなり、酸素がなくなり、命がなくなる」。この中でCDMの医療従事者たちが必死で病院以外の場所で救護をしています。

私には、たまたま、在日ミャンマー人の友人がいただけです。2月1日の「大変だ」という知らせ以降、拷問や遺体の写真や動画を受け取りました。日本政府は未だに、国軍とのパイプを保持し、仲介役を装っています。私が外務省要請を行った時、外交官は国軍を批判することは一切しませんでした。

た。日本は国軍と市民の両者に良い顔を続け、水面下で国軍の後方支援もしています。在日ミャンマー人は不安定な日本での生活の中、今、故郷に帰ると自分も拷問を受けると怯える人もいます。緊急的に在留許可を出すや発表があっても、難民認定はなされていません。恥ずかしく、悔しい限りです。一方で、韓国は当初から国軍の支配に反意を表明し、市民を支持してきました。

私は、自分がいかに無力であるのかということを改めて知らされました。「友だち」「知り合い」と言いながら一体何をするともなく、ただ聴いているだけでいいのだろうか、と。その問いと惜敗の感から、キリスト者に与えられた最も非力に見えて、しかし確実な抵抗「祈り」へと導かれました。毎週金曜日にオンラインで「ミャンマーを覚える祈り会」をしています。毎回、約90人が集まり、情報を共有し祈り、鍋を叩きます。この祈り会から「アトゥトゥ（共にというビルマ語）ミャンマー支援」という支援団体が生み出されました。ミャンマー国内避難者、CDM参加者への支援、日本にいるミャンマー人の在留を支える、顔の見える働きがすでに始まっています。設立後2週間で、草の根で広がった支援運動から100万円を本国送金し、食糧、日用品、医薬品を各地の教会から配布していただいています。イエスが一人一人に出会われたように、小さくとも生身の人間、いのちを大切に作る働きにしたいと思っています。

祈り会：毎週金曜日 夜9時～9時40分（ズーム）

ミーティングID：835 4339 0368 パスコード：540189

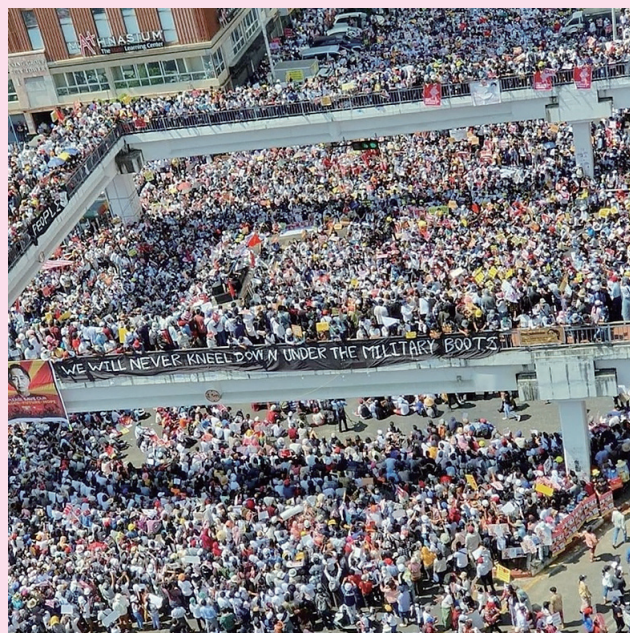
アトゥトゥミャンマー支援

郵便局備え付けの青色払込票で

00190-4-119379

加入者名：外キ協

※通信欄に「ミャンマー」と記してください。



クーデター当初、ヤンゴン市内での大規模民衆デモ